



**HOMO FABER**  
Crafting a more human future



press release

**HOMO FABER 2022**

**Special column vol. 04**

**藤沼 昇** Noboru Fujinuma

重要無形文化財「竹工芸」保持者(人間国宝)

## 素材とまっすぐに向き合う、謙虚な姿勢。



©MOA Museum of Art

藤沼昇の青春時代は、まさに日本の高度経済成長期と重なっていた。各地域で産業技術の新しい担い手を育てるために、1955～65年の日本では各地に次々と工業高校や高等専門学校が生まれていた。

「栃木県那須塩原市にちょうど工業高校が新設され、僕はその第一期生として入学。まだ校舎も完成しておらず、壁のない屋根だけの仮校舎のなかで、空間をカーテンで仕切って授業を受けていたくらいでした。でも、授業の一貫として、学校入り口の敷石やロータリー、自転車置き場など、施設の一部を自分たちの手で作ったりすることもあって、それが楽しくてね。ここでものづくりの最初の一步を踏み出した感じがします」

高校卒業後、カメラメーカー、ニコンに勤務。品質管理の仕事に携わりながら、昔から憧れていたカメラマンの道を目指していた。

「それと同時期に、ユースホステル協会に所属。北海道から沖縄まで、カメラを手に日本全国を旅して周りました。あるとき協会の企画で、ヨーロッパのスキーツアーに参加し、スイスのチェルマトとフランスのシャモニーに出かけたんですが、そこで目にしたヨーロッパの風景に圧倒されてしまったんです」

経由地のモスクワでは、クレムリン、聖ワシリー大聖堂といった錚々たる建物に囲まれた赤の広場、芸術的なモザイクやステンドグラスで彩

られた地下鉄の駅といった建造物のスケールに圧倒された。また、同じく立ち寄ったパリでは、美しく整備されたシャンゼリゼ通りの並木道、凱旋門のあるシャルル・ド・ゴール広場から放射状に伸びる12の通りなど、完璧な都市計画に感動した。

「同じ時代に日本では、発展や進歩という名のもとに古いものをどンドン切り捨て、生活環境が日々目まぐるしく変化していました。でも、ヨーロッパでは、古来のものが現代と絡み合いながら文化を築き上げていて、人々もその様子を誇らしく見ている。その姿がとてつもなく豊かに映りました」

ファインダーでは捉えきれない文化の底力を実感した藤沼は、帰国後カメラとは違うもので、自己表現をしたいと思うようになる。能面づくり、陶芸、漆芸など、諸々試した後、落ち着いたのが竹工芸だった。

「竹という素材は、とても素朴でシンプルで同じように見えながら、ぱつと2つに割れるものから、粘り強いもの。硬いもの、柔らかいものなど個性豊かで、まるで人間みたい。だからこそ、作り手の感性がそのまま作品に現れるものなんですよ」

クセのある素材だけに、技巧を極めれば高い表現を目指せるわけでもないという。

「技術だけで攻めていくと、その場しのぎの“小手先”の仕事に偏り、心が込もっていない小

さな表現に収まってしまう。作家である限り、素材と正面から向き合い、風土と対話していく必要があると思うんです。体の芯で捉えたことを指先へと引っ張り出す。手先から繰り出すのは技ではなくて、自分からストレートに出る思想や感情そのものじゃないのかな」

生来手先が器用な藤沼は、新しい技もすぐに習得してしまう。逆にその力が邪魔をするので、悩みであるとも話す。

「竹は一切隠し立てができない、素直な素材。謙虚でなければと立ち振る舞っても、フリをしているだけでは見透かされてしまうんです。技に頼らず、素材と対峙する時間に生まれる新たな感覚を大切にしたい。制作を続ける限り、人間としてのあり方を一生勉強し続けることなんだと思いますよ」



藤沼 昇／ふじぬま のぼる

1945年栃木県生まれ。1975年より竹工芸を始める。1986年第33回日本伝統工芸展日本工芸会会長賞受賞。2004年紫綬褒章受章。2011年シカゴ美術館にて個展を開催。2012年重要無形文化財「竹工芸」保持者に認定される。2015年旭日小授章受章。